Letters
Arpak
レターズアルパック
VOL.234 ISSN 2432-5295

みず

CONTENTS

◆【みず】…01～04
・大阪と木と水と ・「涼」をもとめてプチハイキング ・水と向き合い想いにふける ・水だしコーヒー ・夏は暑さと大雨でいやになります ・皆さんにとって水とは？ ・納涼床で味わうイタリアンジェラート
◆今、こんな仕事をしています…05～08
◆近況＆イベントのお知らせ…09～10
◆まちかど…裏表紙
・2年ぶりに「清水焼団地」の陶器市が開かれる予定です

みず

水は循環しています。地球上の水は海や地上から蒸発して蒸気となって大気中に蓄えられ、雲を作って地上に雨や雪を降らせます。身近なスケールで考えると、一般家庭では上水道と下水道の使用水量は同じとして計算されます。上水道から使った分が下水道に流れていくという理屈。

水は生命の誕生にも大きくかかわっています。そして、水がないと私たちは生きていけません。生物の体内には水があって、人の場合は6割から7割程度だそうです。体内の水は加齢とともに少なくなります。フレッシュな新人を「みずみずしい」などと表現することがありますが、あながち間違いではないのです。循環していること、生命と切り離せないこと。「水」は特別な存在です。本号のテーマはこの特別な「水」を取り上げ、話題を展開しやすいよう「みず」としました。

レターズアルパック編集委員会

大阪と木と水と

石川俊博：
公共マネジメントグループ

郷土研究上方「上方水涼号」

大阪から東京に移った作家は、樹木の存在感に驚くことが多いようです。

二十年以上前、東京に住んでいた友達が連れて行ってくれた表参道だった。どこかお店にも入ったと思うが、ケヤキのことしかわたしは覚えていない。あんなに太くまっすぐに伸びる幹を私は見たことがなかったし、空を覆うように広がる枝も、森の奥深くみたいな密度で茂った葉も、あまりに圧倒的だった。

（柴崎友香「樹々が伝えてくれるもの。」BRUTUS 2018年3月15日号）

二十五、六年前、私が初めて大阪から上京して、まず驚いたのは東京の町中に木の多いことであった。（中略）ここに来るたびに、二十歳の私は、その山の北端に立っている名を知らぬ大木の根に腰を下ろして、「東京はええな、町ン中に、こないに木イが仰山あって、」と驚きながら口の中で云ったものであった。

（宇野浩二「木のない都」（『新風土記叢書1 大阪』））

宇野浩二の感想が、1910年頃のようなので100年近く経ってもその印象は変わらないようです。

緑地の少なさを示すように、大阪市は政令市で都市公園の面積が最も少ないです。「商人の街だからお金にならない空間は削ってしまって、公園も少ない」などの話を聞きますが、実は削っても気にならなかったのではないかと最近感じています。

それは水の存在があったからではないでしょうか。かつての大阪を描いた絵を見ると、水辺の使い方も楽しそうで上手に見えます。公園のように一息つける公共空間の代わりを河川や水辺が担っていたのかもしれません。大阪出身東京在住の友人にも話したら割と納得してくれましたが、どうでしょうか？

木谷千種「浄瑠璃船」

「涼」をもとめて プチハイキング

清水紀行：
都市・地域プランニンググループ

毎日、暑い日が続いていますが、先日、子どもを連れてプチハイキングに出かけました。行先は、お膝元である「犬鳴山七宝瀧寺」へ。約15年、泉佐野に住んでいますが、実は訪れるのは初めて。（すぐ手前にある小学校には息子・娘も何年も通っているのに・・・）

七宝瀧寺を簡単にご紹介しますと、泉佐野市にある真言宗犬鳴派の大本山の寺院であり、２０１９年に認定された日本遺産『旅引付と二枚の絵図が伝えるまち～中世日根荘の風景～』の構成文化財のひとつです。また、犬鳴山は修験道の霊場でもあるため、全国から修験者が訪れています。作家で泉佐野市観光大使でもある家田荘子さんが出ている広告をご覧になった方もいるのではないでしょうか。

まずは犬鳴温泉まで行き、そこからスタートです。野性味あふれる娘は迫りくる虫など気にせずガンガン進むのですが、息子はその背後に付き、周りを気にしながら追随していくという予想通りの行動。私は子どもたちの安全と自分の体力を天秤にかけつつ、さらに後ろから・・・。景色を楽しみつつ、のんびり歩いて1時間程度で目的地には到着できるので、多少の疲労感はあるものの山歩き超初心者の我々でも全然問題ありません。新緑の青葉、犬鳴川のせせらぎ、そこを流れる清水が彩る大小の滝と渓谷美。日々の喧騒から逃れ、自然のなかで涼やかなひとときを過ごすことができました。

前述したとおり、ここは修験道の場としても有名で、事前予約すれば、山行場を4時間歩き、最後は滝に打たれるといった修行体験もできます。もちろん私は遠慮しますが、ご興味のある方は是非体験してみてはいかがでしょう？

水と向き合い想いにふける

髙瀬咲：
地域再生デザイングループ

「瀬をはやみ　岩にせかるる　滝川の
われても末に　逢はむとぞ　思ふ」

百人一首に初めて触れた子供時代、自分の名字の漢字が入っているこの歌のことが気になり、意味を調べて、逢瀬と川の瀬をかけた歌だと知ったとき、そのおしゃれさに衝撃を受けました。そこから「恋ぞつもりて淵となりぬる」などの美しい比喩表現に魅了され百人一首が好きになったのを覚えています。

その経験が影響しているのかは分かりませんが、tofubeats「RIVER」やペトロールズ「雨」など、想いを水にたとえた曲がとても好きです。古来も現代も人々は、捉えどころのなくコントロールできない想いを似た性質の水と重ね合わせ、内省的ではなく客観的に循環していく気持ちの良い流れとして思考をとらえようとしているのかもしれません。

私も、悩んだときや疲れたときは海や川などを見に行き、好きな音楽を聴きながらただただ眺めます。使い古された表現かもしれませんが、雄大な水の流れを前に、もやもやしていた気持ちが流されていき、段々気持ちが凪いでいく感じがします。

以前住んでいた福井には大好きな水辺が多く、悩みのあるなしに関わらず、九頭竜川・足羽川などの大きな川や、若狭和田・三国湊などのきれいな海に頻繁に通っていました。京都に越した今も、鴨川や桂川に散歩に行ったり、3ヶ月に1度は足をのばして海を見にいき水から力をもらっています。

これからお気に入りの水辺を増やしたいと思っているので、皆さんのおすすめの水辺や、水辺で聴くのにぴったりの音楽がありましたらぜひ教えてください。

水だしコーヒー

中川貴美子：
サスティナビリティマネジメントグループ

コロナ禍になって、在宅も組み合わせながらのワークスタイルになって、新しい習慣になったことがあります。それは、近所のコーヒーショップで、豆（といっても、店で挽いてもらっています）を購入して、自宅でコーヒーを入れるようになったのです。住む場所を選ぶ時がきたら、美味しいコーヒー豆を売っている場所のそばがいいな、と思うくらいには、大切なことになっています。

以前は、気分転換にコーヒーショップに買いに行く、ということがメインでした。また、コーヒー豆を買う、ということもなかなか初心者にはハードルが高く、近所のコーヒーショップもたくさんの豆が置いてあるのに、たまに、イートインで飲むのみ。という使い方でした。そんな中、外出自粛など、移動が制限され、生活の選択肢が狭まる中で、新しい選択肢に手を伸ばす余裕が出来たのでした。

コーヒー豆はその時の気分で買うため、少量購入にして、定期的にコーヒショップに通うようになり、店内に置かれているグッズも気になるようになり、昨年の夏の終わりに（もう終わりというのに）、水出しコーヒー用のボトルを購入しました。

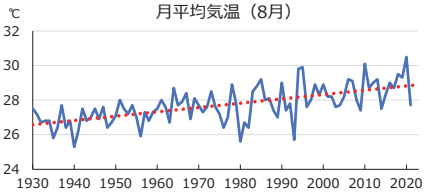
水だしコーヒーは、水で浸してゆっくり抽出します。お湯で抽出するより、マイルドな味わいに仕上がるそうです。同じコーヒー豆でも、お湯だしと水出しでは味が異なり・・・、というほどまで、極めているわけではありませんが、購入したのが夏の終わりだったこともあり、今年の夏から、本格的に利用しだしています。

買う前に、こんなに、コーヒーグッズを買い足して、緊急事態宣言が終わったら、家で使わなくなるのでは？とやや心配していたのですが、そんな心配は取り越し苦労だったようです。水だしコーヒーで、何より、気に入っているのは、夜仕込めば、朝起きたときに、美味しいコーヒーが即飲めるということです。

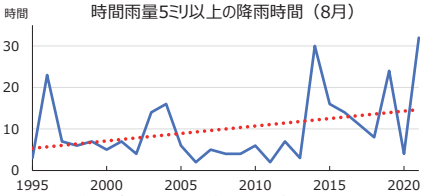
水だしコーヒーを成り立たせているものが、どこから来ているのか、上流までさかのぼって考えると、いつまで楽しめるか分かりませんが、今楽しめる、ひとときの暮らしの楽しみとして、しばし楽しみたいと思います。

夏は暑さと大雨でいやになります

長沢弘樹：
サスティナビリティマネジメントグループ



※京都地方気象台のデータを用いて作成（1930-2021）



※京都地方気象台のデータを用いて作成（1995-2021）

うだるような暑さとスコールのような土砂降りの繰り返し。今年の京都の夏はこんな感じです。延々と雨が降っている気がするので、夕立という言葉を使うのを避けてしまうほどです。野良猫もやる気なくたたずんでいます。

いつの間にか人生の過半を京都に住んでいますが、住み始めた頃は、夏の雨も暑さもこれほどではなかったと思います。

暑すぎると思っても、エアコンのない生活をしていました。鴨川におりて、水に入れた足を通り抜ける風に涼しさを感じることもできました。しかし、今ではそんな余裕はまったくありません。部屋ではエアコンから離れられず、陽が照る時間は外に出るのを避ける毎日です。夏の在宅勤務では、めっきり家から出なくなってしまいました。

私は環境関連業務を担当していますが、地球温暖化に関して日本の平均気温が百年で約1.3度上昇したとかゲリラ豪雨が増えたなどの話題がよく出ます。ただ、今年の京都の夏を思うと、気温はもっと上がり、大雨も激増している気がしました。

それで京都地方気象台のデータから8月の気温と大雨の頻度を確認してみました。大雨の基準は時間雨量5ミリです。

かなり暑くなっていました。大雨も増えている気がします。「やっぱり」です。

ただ、よく考えると、最近天気が気になるのは、コロナで在宅勤務が日常になり、暑さや大雨が目に見えるようになったからな気がしました。そう思うと、暑さや雨が気になるのも、案外と豊かな生活な気がします。エアコンは欠かせませんけどね。

散歩中に雨宿りする野良猫

皆さんにとって水とは？

近江篤：
総務部

「水」をキーワードにして思い浮かべると「Wednesday」を連想します。「水曜日」は、ちょうど週の半ばであり、世間では『ノー残業Day』というフレーズで定時に帰りやすいことは、浸透していると思います。

不動産業界や建設住宅業界では「水曜日」が休日になっている企業が多いことも連想してしまいます。「水曜日」が休日になる理由は周知のとおりですが、『契約が水に流れる』『BtoCの仕事が多く、土日に対応するお客様が多い』等が挙げられます。不動産の価格はどうしても高額で手続きも手間暇もかかることが多いことから、契約が水に流れないよう縁起担ぎ又は不動産業界の風習で「水曜日」を休みにすることになったといわれています。

平日が休みというメリット・デメリットは個人の価値観や置かれている環境でそれぞれ違いがあるかと思われますが、やはりそのような風習により不動産業界でも人材離れや多様な働き方改革の遅れに対応する動きもあり、土日祝を休みする企業も少しずつですが、出始めているのが現実です。

「水」はこのように悪いイメージで使われるフレーズなのかもしれませんが、一方では同じ「水」でも使い方次第で『水に流す』等、コミュニケーションを円滑にする手段として良いイメージで使われることもあります。お互いの間にあったいざこざや気まずさを、「なかったことにしたい！！」という気持ちは人間誰しもあるのではないでしょうか？

過去のトラブル等で関係性が悪化した取引先や友人がいたら一度ダメもとでもいいので、こちらから積極的に仲を取り戻す姿勢を相手に少しだけでも伝えましょう。伝える努力を怠らない限り、今まで関係性が悪化した仲はきっと取り戻せるかと私は信じています。それゆえ、新しく関係性を更に深めるということでピンチが大チャンスにつながる経験を私は今までのキャリアを通じて学んできました。言語とは不思議なもので、その人の価値観や考え方で受け止め方がそれぞれ異なり、改めて伝え方が大事だなと痛感しております。

皆さんにとって「水」とは何でしょうか？

納涼床で味わう イタリアンジェラート

水谷省三：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

先日、鴨川納涼床でイタリアンジェラートを味わってきました。京阪祇園四条駅から徒歩約5分の団栗橋近くにある鴨川に面したBABBI GELATERIA KYOTO（バビ ジェラテリア京都）というお店で、ジェラートや焼き菓子、ケーキ類等のスイーツが売られています。車で乗り付けてテイクアウトする人もいれば、旅行者等がシュガーコーンを持ちながら気軽にテイクアウトしていく姿も見られました。

このお店は、納涼床の設置期間中、イートインしたい場合、商品代と合わせてお席料（1人550円）を支払うと納涼床の上で飲食ができます。昼下がりの暑い時刻に行きますと、ジェラートが早く溶けてしまうので、ゆっくりと川辺で滞在したい方は、夕涼みで訪れることをお勧めします。

コロナ禍の影響もあり、鴨川で納涼床を出して営業される店舗が減少してきています。令和元（2019）年に98店舗あったものが、今年は85店舗になってきています。京都の夏の風物詩である納涼床が少なくなっていくのは残念なことですが、昨年の夏から、納涼床の設置期間が1ヶ月ほど期間延長され、5月から10月までの営業期間（お店毎に営業期間や時間が異なります）となっています。上記のお店以外にも納涼床を利用できるカフェ店舗（スターバックスコーヒーやKAWA CAFE）もありますので、鴨川付近を散策しながら納涼床に立ち寄ってみるのはいかがでしょう。

溶け始めたジェラート

団栗橋からみるBABBIの納涼床

瀬戸内市らしい土地利用を考える 市民まちづくりフォーラムが開催されました

石川聡史：
都市・地域プランニンググループ

社会全体で人口減少・少子高齢化が進む中、地方都市では空家・空地や耕作放棄地の増加、賑わいの低下、自然災害の多発など土地利用に関連する課題が山積しています。

持続可能で魅力的なまちにしていくために土地利用の面からどんなまちづくりを進めていくべきかを考える市民まちづくりフォーラムが6月12日に岡山県瀬戸内市で開催されました。我々が支援させていただいている国土利用計画の策定に向けた取り組みの一つで、市民に土地利用に関心をもってもらい、共に考えていくためのものです。

フォーラムでは「まちづくりのグランドデザインを考える」をテーマに、東北芸術大学教授で建築家の馬場正尊講師による基調講演と国土利用計画審議会委員によるパネルディスカッションが行われました。

馬場講師からは「瀬戸内市らしさとは?」「守るべきこと・風景」「変えるべきこと・風景」をしっかりと考えて計画に還元していくことが重要だという指摘がありました。また、事前に参加者に書いてもらったまちづくりのアイデアカードを紹介しつつ、瀬戸内市が目指す風景やそれに向けた方法論などについて市長も交えて意見交換が行われました。

瀬戸内市は、オリーブの生産や牛窓の観光地が有名で、岡山市に隣接するベットタウンとしての性格も持っています。そのため、地域特性を活かした土地利用がまちづくりの重要な要素ですが、都市計画区域の指定がないことから土地利用コントロールや都市基盤整備をどのように進めていくかが議論の焦点の一つとなっています。

この日の意見交換を踏まえ、瀬戸内らしさを生かしながらどのようにして持続可能なまちづくりにつながる土地利用を目指すのか模索が続きます。

宍道湖の畔で、これからの土地利用制度を考える

坂井信行：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

2005年に当時の宍道町と合併したことで松江市には松江圏と宍道の2つの都市計画区域が併存しています。

隣接している区域であり1つの都市圏なので本来は統合すべきなのですが、前者が市街化区域と市街化調整区域の区域区分（いわゆる線引き）を導入しているのに対し、後者は線引きを行わない非線引き区域で、どちらかに統一しないと統合ができません。線引きの是非については賛否あって過去から継続的に議論が重ねられてきていますが、結論には至っていません。今回、私たちは松江市の土地利用制度のあり方について検討する業務を受託することになりました。線引きを廃止するのかしないのか、フラットな立場で検討を進めるものです。

そもそも線引き制度は、高度経済成長期の大都市圏における急激な開発需要の増大に対応するために導入されたものです。検討を始めるにあたり、制度創設当時の宅地審議会での議論なども改めて調べています。市の担当者には、毎回の打ち合わせの際に土地利用制度などについての勉強会的な時間をとることを提案しました。

松江市のような地方の中核都市において、これからの都市構造やそれを担保する土地利用制度はどうあるべきなのか。国が旗を振るコンパクト・プラス・ネットワークの考え方を単純にあてはめるだけで済まないことは明らかです。都市計画法よりも少し先を見ながらのクリティカルなデザインアプローチが求められます。全国には参考になる取組の事例もいくつか出始めているようです。まだはじまったばかりの業務ですが、タイミングをみてまたご報告します。

宍道湖に沈む夕陽

タケノコプレイパーク～一年目の業務をつなぐ仕事

竹内和巳：
生活デザイングループ

計画に携わった公園が昨年度完成しました。この公園がみんなの思い出の場所になるかはこれから次第です。

愛される公園になるよう、できるカタチで関わり続けたいと思います。

◆入社1年目に再整備素案を作成した公園が昨年度4月に完成しました

昨年度の4月に、私が1年目に再整備素案の作成に携わった洛西竹林公園内の子どもの広場が完成しました。

再整備では、子どもたちが自ら考えて自由に遊べるような場にすることをコンセプトとして整備しましたが、公園で子どもたちが自由に遊ぶ姿や、芝すべりができる場所の芝生がその後ズルムケになっている様子を見て、月並みですが「ああ、よかったなあ」と思いました。

◆任意団体として、完成した公園でプレイパークを開催しました

完成した公園では、子どもたちがより楽しく遊べるような企画を色々考えていたのですが、諸般の事情で行政では難しい状況になったので、それなら自分たちでやるか、と「たけのこプレイパーク実行委員会」という任意団体を立ち上げて活動することに。

年度末の慌ただしさに震えながら、今年の3月に第1回の活動を開催しました。

当日は大変なこともたくさんありましたが、来てくれた方ははじめて竹を切って運んだり、つくったあそび道具で遊んだり、その中で色んな表情を見ることができて一安心しました。

次回の企画会議が段取りできていない心苦しさに押しつぶされそうなので、このあたりで。（笑）

公共建築物等への木材利用を促進するための研修会を開催しました（愛知県）

新開夏織：
建築プランニング・デザイングループ

愛知県では、戦後盛んに造林されたスギやヒノキの人工林の多くが利用期を迎えています。

脱炭素社会の実現や、地球環境・社会・経済の持続性を高める取り組みの中で、建築分野等における木材利用を進めていくことが重要になっています。

本業務では、その中でも公共建築物等への木材利用を促進するため、市町村職員を対象とした研修会を全3回開催し、木材利用に関する基礎的な知識や、各市町村が木材を利用する意義、公共発注ならではのポイント等を伝えていきます。

その第1弾として、7月20日（水）に座学研修を開催しました。講師はサスティナビリティマネジメントグループの畑中、建築プランニング・デザイングループの三浦が務めました。畑中からは気候変動を背景とした脱炭素・木材利用の動きやコストの考え方、三浦からは愛知県での実例に基づく木造・木質化建築の特徴や木材調達・公共発注における留意点等、これまでのアルパックでの取り組みや、公共建築の受注経験等を踏まえ、環境・建築の両側面からのお話をしました。

研修会の様子

参加された方からは、脱炭素を進めていく必要性や発注の留意点を学べてよかったという一方で、業務を行う上で感じている課題や木材ならではの悩みなど、様々な意見が寄せられました。

私事ですが、純和風の木造の家で育ち、すぐ近くの裏山にはヒノキ林が広がる環境の中で過ごした経験があるからか、今でも木を使った物や空間が大好きです。建築を専門に計画づくりや設計に関わる立場になった今、環境面でも注目されている木材利用について、私自身も勉強しつつ、こうした現状や課題にも向き合っていきたいと思っています。

今後の研修会では、実際に製材工場や木材を利用した公共建築の見学や、川上～川下のそれぞれの立場で木材に関わっておられる方のお話を伺う場などを企画しています。本研修を通して、木材の生の世界を体感し、森林・木材の利用に対する理解を深めていただくとともに、県内の木材利用のネットワークを繋ぐお手伝いをしていけたらと思います。

「木地師文化フォーラム」が３年ぶりに開催されました

髙瀬咲：
地域再生デザイングループグループ

7月18日に東近江市愛東コミュニティセンターにて、「木地師文化フォーラム」が開催されました。

本フォーラムは、平成28年よりお手伝いしている「木地師のふるさと」発信事業の一環として、東近江から全国に波及したと言われる「木地師文化」について理解を深め、発信していくことを目的に、現役の木地師の方や木地産業に関わる方にご登壇いただくイベントです。感染症拡大の影響で3年ぶりの開催となりましたが、山形県、香川県など、全国から約１７０人にご参加いただきました。

今年度は、石川県輪島市で漆作家・木地師としてご活躍のスザーン・ロスさん、東近江市在住の木地師である北野宏和さん、東近江市をフィールドに森林を研究する山下直子さん、猛禽類保護を通じた森林保全活動を行う山崎亨さんの４名にご登壇いただきました。

シンポジウムの様子

フォーラムでは、山下さん、山崎さんより、「木地師文化を育んだ東近江の森林」と題しご講話いただき、スザーンさんより「漆に魅せられて」と題し、イギリスから輪島に移住し漆作家として活動してきた経緯や、漆文化の魅力、文化継承の大切さについてご講演いただきました。また、「木地師文化と漆工芸の現在と展望」と題し、スザーンさんと北野さんによる対談を実施いたしました。

来場者の方々からも多くの感想や質問をいただき、「木地師文化」を多角的な視点で捉えた活気あるフォーラムとなりました。

お知らせ：9月に東京上野で「木地師シンポジウム」を開催します

令和４年９月18日（日）上野の東京国立博物館平成館にて「木地師と漆―未来を紡ぐ伝統文化―」と題した東近江市主催の公開シンポジウムを開催します。

東京藝術大学名誉教授の三田村有純さんによる「日本の基層文化としての漆芸」と題した講演及び、漆作家、研究者、行政の多様な立場の方による、木地師文化、漆器産業の課題と展望についてのパネルディスカッションを行う予定です。

詳細はアルパックのWebサイト等でもお知らせします。ぜひ皆さまご参加ください！

自然・アウトドアの魅力を磨く
～兵庫県猪名川町の観光振興の将来ビジョン策定支援～

松下藍子：
都市・地域プランニンググループ

兵庫県猪名川町において、第二次猪名川町観光振興基本計画および大野山将来ビジョンの策定支援を行い、今年３月に計画が策定されました。

猪名川町は兵庫県の南東部にあり、大阪や神戸から比較的近く、都市部からのアクセスのよい場所に位置します。道の駅と大野山という山頂にあるキャンプ場などが主な集客資源となっています。（大野山キャンプ場についてはアルパックニュースレター２３０号を参照）

今回、観光のビジョンを描くにあたり、他にも多数の資源があるものの、町全体の来訪者の増加にはなかなかつながっていないこと、住宅都市ということもあり観光による経済効果が限定的であること、一部地域で空き家や高齢化など問題が進行していること、などがまちづくりの課題として挙がりました。

一方で、コロナ禍のなか、都市部に近い身近な自然環境というポテンシャルを活かして、マイクロツーリズムやアウトドアの観光をより進めていこうという方向が出され、将来像は「自然好きが集まる『猪名川まるごとオープンフィールド』」としました。

実際猪名川町には、山があり、森があり、清流があり、きれいな星や夕日が眺めがあり、この環境に惹かれて活動する人たちがいて、とても魅力的な資源がたくさんあるのです。

今回の計画では、「みんなでつくるチャレンジプロジェクト」として、夢がふくらむ様々な観光振興のアイデアを載せています。気持ちのよい川沿いや森の中で食を楽しんだり、森林を歩いて癒しの効果を得たり、星空観察をしたり…、日常から少し違ったことをするだけですが、自然の楽しみ方は多様で、工夫次第で様々な可能性が広がります。皆さんも少し足をのばして、アウトドアを楽しんでみるのはいかがでしょうか。

教育旅行の高次化に向け、探究学習型プログラムを開発しました

江藤　慎介：
地域産業イノベーショングループ

文部科学省は学習指導要領の改訂に当たり、生徒が自ら課題を設定し、情報収集、整理・分析、まとめまで取り組む「探究学習」を前面に押し出しています。

こうした中、修学旅行を含む校外学習においても、従来の「体験学習」から「探究学習」への移行が模索されています。

敦賀市・小浜市・美浜町・高浜町・おおい町・若狭町が立地する若狭湾エリアは、恵まれた地域特性を活かし、様々な体験型観光コンテンツを造成、全国の教育旅行を受け入れてきましたが、コロナ禍において県外の教育旅行による来訪者数は激減しました。そこで観光庁「地域の観光の磨き上げを通じた域内連携促進に向けた実証事業」に応募し、自治体を中心に観光施設、旅行業者、教育関係・学識経験者等、数多くのステークホルダーが連携し、探究学習型プログラムによる教育旅行の造成に取り組んできました。

具体的には、協議会及び3つの作業部会を立ち上げ、各6回、合計24回の会議を通じてプログラムを検討するとともに、探究学習型の教育旅行を先行実施する長崎市等を視察しました。また、ウィズコロナ時代を見据え、オンラインでも学習できるよう、VRコンテンツの作成にも取り組みました。以上を踏まえ、地元中学校・高校に協力いただき、「漁業」及び「年縞」の2つのモデルプログラムを実証しました。

開発した「探究型教育旅行プログラム」のパンフレット

探究学習型プログラムによる教育旅行の受け入れは、プログラムの量と質、受入体制の構築及び学校との連携、オンラインとオフラインの組み合わせなど、課題は多くあるものの、若狭湾エリアでは最初の一歩を踏み出すことにつながりました。新たな教育旅行を見据え、今後も若狭湾エリアが一体となって取り組んでいくことが期待されます。

＊本業務は、地域産業イノベーショングループ（江藤）及び株式会社よかネット（原）が関わりました。

豊中市の食品ロス削減推進計画の策定を支援しました

長沢弘樹：
サスティナビリティマネジメントグループ

2019年に食品ロス削減推進法が施行され、食品ロス削減に取り組むことが自治体の義務となったことから、計画の策定が少しずつ広がっています。

昨年度、豊中市の食品ロス削減推進計画の策定を支援しましたのでご紹介します。

豊中市は人口約40万人で、食品ロス量（令和2年度）が約1万6千トン（市が処理するごみ量のみ）です。このうち家庭からの食品ロスが約1万トン（63パーセント）です。市民1人1日当たりでは約70グラムと、全国平均を上回っています。

豊中市ではこれまでもごみ処理基本計画やごみ減量計画等で食品ロス削減に取り組んできました。現在も、家庭や飲食店での食べ残しの削減や冷蔵庫に入れたまま期限切れになって捨てられる食品の削減などの市民や事業者への啓発や、家庭で余っている食品を寄付するフードドライブへの協力の呼びかけなど、様々な施策を進めています。

特にフードドライブについては、取組を始めた平成29年度から令和3年度までの5年間で、取り扱い量が10倍以上になるなど、かなりの成果をあげてきました。

一方、食品ロス削減推進法では、啓発活動等による意識定着に加えて、まだ食べられる食品をなるべく食品として活用することを求めています。そうしたこともあり、食品ロス削減推進計画では、飲食店での持ち帰りの普及やフードシェアリングサービスの活用、フードドライブのさらなる拡充など、食品ロス削減に具体的に寄与する取組を重視しているのが特徴となっています。

アルパックでは、過去40年以上前から、家庭から食べられないまま捨てられる「手つかず食品」の調査を行うなど、食品ロス対策に取り組んできました。少しずつ成果が上がってきていますが、解決にはほど遠いのが現状です。

近年、SDGsの普及や食品ロス削減推進法の施行など、食品ロスへの関心が高まっています。こうした機会を活かし、食品ロスの削減を飛躍的に進められればと考えています。

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

45回
2022年
5月13日

「パリの15分都市～人中心のまちをめざす都市再編～」
講師　立命館大学理工学部教授　岡井有佳氏

第45回目を迎えた適塾路地奥サロンでは、岡井有佳氏をお招きし、車中心から人中心の都市へと転換を図っているパリの都市再編についてお話しいただきました。

講演では、市内全域でのゾーン30の導入やロータリーとなっている広場の歩行者空間の拡張、歩行者専用道路の拡大など、強力でセンセーショナルな施策を行っていることをご説明いただきました。
こうした施策の背景には、ヨーロッパで関心が高まっている環境問題や新型コロナウイルスの流行によるロックダウン、2024年に開催を迎えるパリオリンピックといった社会的な背景があることをご説明いただきました。これらの社会背景を本質的に解決しようとしたとき、都市として目指すべき姿は「人中心」と一つの答えにたどり着きます。背景は長期的な課題であったり、短期的な課題であったり、そもそも課題ではなく楽しみであったりと、様々ある中、施策として一つの解にたどり着くのは非常に興味深いと思いました。

私は人が使う都市を、人のためにデザインしたとき、都市は最大多数の最大幸福が得られるのではないかと思います。パリの事例を参考にしながら、日本や各都市のやり方で人中心のまちづくりが実現できないか、その方法を探していきたいと思います。（辻寛太）

46回
2022年
6月20日

「都市が人を生み、人が都市を生む ～「アーバニスト」としての都市への関わり方～ 」
講師　東京大学大学院工学系研究科
准教授　中島直人氏

第46回では、中島直人氏をお招きしました。

前半では社会技術としての都市計画を専門家が担っていた時代から、アーバニストと呼ばれる様々な実践家が都市に生活し楽しみながら、魅力的な都市を計画・創造する現代までの歴史的経緯について説明していただき、後半では文化運動としての都市計画の実践例というテーマから、先生自身が関わっている上野でのアーツ＆スナック運動と、有楽町アートアーバニズムについて紹介していただきました。

都市を計画することでそこにどんな人が生まれるのか、そこで生活することを楽しみながら「人」は都市の将来をどのように描くことができるか、そうした思考を往復しながら実践するアーバニストが、これからのまちづくりで重要な役割を果たすのではないか、という問いかけだったように思います。参加者からも自らの実践を交えた質問が投げかけられ、充実した講演となりました。私もこうしたアーバニストの一人でありたいと思います。（植田啓太）

「中小企業の日」企画（第３回大阪わかそう）を開催しました

相談役（大阪同友会副代表理事）　杉原五郎

7月20日(水)、大阪市中央公会堂で、「中小企業の日」企画が開催されました。大阪府中小企業家同友会と大阪府・大阪市による共催でした。

朝10時から企業展がスタート。同友会会員企業90社と大阪府・大阪市など6つの公的団体、金融機関が100ブース展示しました。11時から、出展した企業から抽選で選ばれた企業によるプレゼンテーションが行われ、中小企業の魅力が力強く語られました。

午後1時半から、「地域で育む命の継承～中小企業が輝く未来のデザインを描こう～」をテーマにフォーラムを開催。日本万国博覧会協会の機運醸成局課長が、30分ほど2025大阪・関西・万博のテーマ、開催概要についてスピーチしました。続いて、岩手同友会の田村満代表理事が基調講演を行いました。田村さんは、3.11東日本大震災で直面した困難を乗り越えて新たな起業にチャレンジしている陸前高田市40社の取組みを紹介しました。

田村さんの講演は、「東京一極集中」と「絶対的衰退の危機」に直面している大阪にとって大きな勇気を与えるものでした。7月20日は、中小企業の魅力を語り、社会的・経済的役割を自覚する大切な一日となりました。

企業展の開催状況

近況＆イベントのお知らせ

30を過ぎて再び大学へ

稲垣和哉：
東北大学大学院情報科学研究科（アルパックＯＢ）

この５月から母校（東北大学）に籍を移しました。約４年の間ですが、アルパックではいろいろな経験をさせてもらいました。日々の業務もそうですが、それに加えてたくさんの街を歩いたこと、何気ない会話の中に、色んな気づきがあったように思います。そういう中で、個人的な関心を深めていきたいという気持ちが大きくなり、30を過ぎて再び大学へ戻ることに決めました。

今の肩書きは研究員ですが、10月からは博士課程に進学予定で、久しぶりに学生となる予定です。仙台は長い学生時代を過ごした青春の場所ですが、失敗や挫折を経験した場所でもあり、身の引き締まる思いがします。

早いもので３ヶ月が経ち、日々の生活にも慣れてきたところです。環境は色々変わりました。研究室は青葉山（仙台駅から地下鉄で10分くらい）というところにあるのですが，こんもりと茂った木々の中、ゆったりとした時間が流れています。淀屋橋のような都会の喧騒の方が肌にあっているのですが、たまにはこういうのも良いかなと思ったりしています。

研究室のある青葉山キャンパス

周りにいる人たちも、大人から、学生に変わり、平均年齢が大幅に引き下がりました。毎週ゼミがあり、読んできた論文、進めてきた研究について、先生や学生の皆さんと議論しています。素朴な質問、切れ味のあるツッコミなどいろいろ飛び交いますが、年齢関係なく日々みんなで成長している感じがします。

しばらくは仙台にいる予定です。もしこちらに来られることがあれば、ぜひご飯にでもいきましょう。お店探しておきます。

事務所だより

名古屋

「名古屋事務所が６月に名古屋国際センタービルに移転しました」

名古屋事務所長　畑中直樹

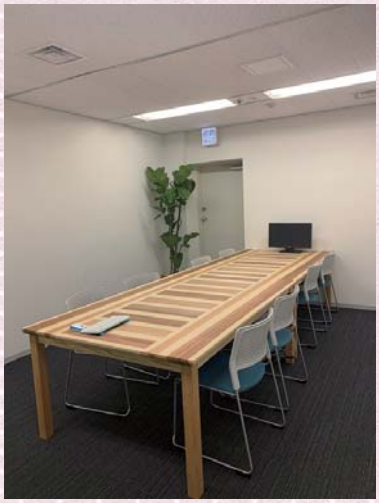
名古屋事務所が、６月20日から名古屋国際センタービルに移転しました。

移転を契機に、全社的に所員が利用しやすいよう完全フリーアドレス化するとともに、「サーキュラーエコノミー」や「地域経済循環」について自らの実践の一環として、受付カウンターや会議室テーブル、デスクの愛知県産材による木質化、所員のDIYによる木製ごみ箱の導入、脱プラを進めました。

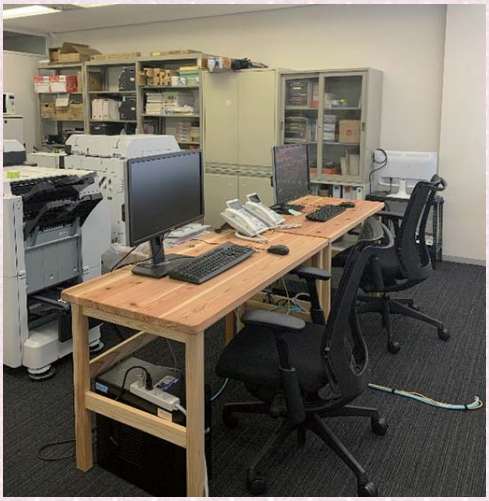
みなさま、是非お気軽にお立ち寄りください。

＜新住所＞
〒450-0001
名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F

愛知県産材の受付カウンター・テーブル



愛知県産材の会議室テーブル



フリーアドレス化した執務スペースと愛知県産材のデスク

Letters Arpak
レターズアルパック

〔レターズアルパック〕234号　2022年7月発行（株）地域計画建築研究所　https://www.arpak.co.jp

まちかど

2年ぶりに「清水焼団地」の陶器市が開かれる予定です

三輪泰司：
名誉会長

清水焼団地は、創立者が一世代上で、先輩格ですが、生い立ちは、アルパックの草創期と重なっています。

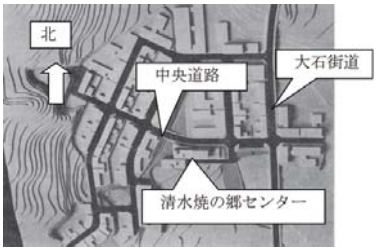
1961年（昭和36年）5月、京都陶磁器協会を母胎に結成された「清水焼団地造成同志会」は翌年「清水焼団地協同組合」に改組されました。「団地」は、面積6.7ヘクタール。事業手法は、組合一人施行の土地区画整理事業です。組合は、マスタープラン作成を京都大学西山研究室へ委託しました。絹谷祐規助教授の担当でした。1963年（昭和38年）10月30日、料亭中村楼での総会に報告され、採択されました。都市計画事業ですが、京都市商工局所管で、木下稔局長がキーパーソンでした。

陶器市風景　記念誌より

そもそもの「目的」は組合員の健全経営です。1956年（昭和31年）5月に制定された「中小企業振興助成法」を活用するのです。信用金庫の融資担当者と都市計画の担当者がペアーを組んで、組合員を個別訪問し、300平方メートルを区画基準単位とし、所要の敷地・建物規模と売上・返済能力を協議しました。「経営指導」です。中小企業を相手に「よい会社をつくろう」と言いますが、簡単に決算書は見せてもらえません。作家さんなど、「帳面」すらない。「助成金」というニンジンが要るのです。

「区画整理」は都市計画の技術的「手段」ですが、固有の役目があります。国道1号からの進入路「大石街道」を都市計画街路にしてもらい、減歩率を下げました。「合併施行」です。「業種別配置計画」は、街道よりには問屋、北には陶土、西の静かところには作家さんといった具合です。幅員12メートルの中央道路は、広すぎないかと言われましたが、1975年（昭和50年）から始めた「陶器まつり」のけっこうな会場になりました。都市プランナーには、造形デザインのセンスが求められるのです。

こうして、1964年（昭和39年）11月30日、事業計画決定に到りました。区画整理事業で、建物が建て終わるにはほぼ10年掛ります。1966年（昭和41年）9月には、小川長楽さんと木村盛和さんの工房を設計しました。モデルです。都市プランナーは、建築もできますが、全部設計する必要はありません。建築事務所と協働すべきです。1969年（昭和44年）には概成し、11月13日、換地処分。「清水焼団地町」という町名ができました。組合は、2011年（平成23年）6月、創立50周年を記念して、お祝いをし、記念誌を刊行しました。



マスタープラン

創業前のアルパックのメンバーは、都市計画事業の実務を経験し、「目的と手段を間違ってはならない」というコンサルタントの原則を学びました。

清水焼団地では、黒楽の三代目小川長楽、交趾焼の中村翠嵐はじめ、伝統様式と刷新運動をリードし、創造の息吹が脈打っています。

お茶碗を買換え〝刷新〟しましょう。

※「清水焼の郷」の陶器市は、10月21日（金）～23日（日）。京都駅前から市バス直行便があります。

表紙写真：夕暮れの若狭湾（撮影　髙瀬咲）

「レターズ アルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。

arpak

アルパック（株）地域計画建築研究所
Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp　E-mail:info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 いちご大手町ノースビル4F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)6273-7715
九州事務所	〒810-0802 (株)よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168
ホーチミン（ベトナム）	No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward,District1, Ho Chi Minh City, Vietnam		

再エネ100宣言 RE Action
この用紙は「びわ湖の森を元気にする」kikitoペーパーを使用しています。